

## 東日本大震災救援職員報告

4月1日、社会福祉法人幸清会・大滝福祉会（大久保幸積理事長）の平成23年度入社式が、総合ケアセンター大原（旧大原小学校）で行われ、新入職員24人が緊張した面持ち辞令を受けました。

式に先立ち、震災の犠牲者に黙とうをささげた後、3月25日から31日まで、宮城・茨城の両県で、グループホームや老人ホームなどで救援ボランティア活動にあたった職員6人が活動の報告を行いました。

代表して船津みゆきさんが、「現地の職員も大変な思いをしている。自分の家族の遺体も探しきれていない」など現地の状況を述べ、「水があり、3食食べられる、当たり前前の生活のありがたさを改めて感じた」と新入職員に訴えました。



新入職員の前で震災支援の報告をする職員ら



みんなが協力  
がんばろう岩沼

応援のメッセージが書か

機会に友好の絆を作って行ければ」と話していました」  
「現地を見て洞爺湖町の防災についても考えられたそうですね。」  
「現地の人の話を聞くと『普段から防災には気をつけていたが、どこか慣れがあり、自然を甘く見ていたところがあった』と反省する声を聞きました。防災教育の大切さと日頃からの徹底した防災訓練の必要性を強く感じました」

## 災害派遣支援

管内の市町長会議で、管内の市町と胆振総合振興局の職員が「オール胆振」で、東日本大震災の被災地を支援することを決定し、当町からこれまでに4人の職員が派遣されました。派遣を終えた3人に被災地の状況を語ってもらいました。



税務財政課  
税務グループ  
主任 平間 剛志

4月1日から9日まで被災地支援のため、伊達市と姉妹都市の宮城県山元町に派遣されました。

町内最大規模の避難所で、日中は、支援物資の在庫整理、仕分けなどの作業を行い、夜は避難所の当直を行いました。

有珠山噴火も経験していますが、それとは比べようもないほどの被災状況で、言葉もありませんでした。

すでにしっかりと自治会が組織されており、避難所内は落ち着いた印象を受けましたが、町民は「いつ帰れるのか」など多くの不安を抱えているようでした。

次の有珠山噴火に備えて、今回の貴重な経験をいかしていければと思っています。

4月13日から21日まで被災地支援のため、伊達市の姉妹都市の宮城県山元町に派遣されました。

町は、瓦礫の山が手つかずの状態で残り、見る影もありませんでした。

避難所では昼は窓口業務、夜間は当直を担当しました。

避難者は、人的災害を目の当たりにして強いショックを感じながらも、仕事や生活の中で、自分で出来ることは自分でする前向きな姿が見えました。

どのような言葉をかけてよいものか、言葉がみつかりませんが、少しでも早く、以前の生活を取りもどす事を強く願っています。



上下水道課  
水道下水道グループ  
主任 浜中 正志